The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Reduced schematic inference in patients with social anxiety disorder
Author(s)	磯部, 祐子
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/101897
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　磯部　祐子　）	
論文題名	Reduced schematic inference in patients with social anxiety disorder （社交不安症患者における文脈からの推論機能の低下）

論文内容の要旨

【背景】

社交不安症（SAD）は、他者からの注視や評価を受ける社交的状況において、強い恐怖や不安を感じる精神疾患である。これにより日常生活や社会的活動に重大な支障を来すことが知られている。SADでは曖昧な状況を否定的に解釈する傾向が指摘されており、このような認知特性が症状にどのように影響するかを解明することは重要である。先行研究では、SAD患者が社会的認知機能、特に心の理論や社会的手がかりの解釈といった領域における機能低下を示すとされている。しかし、SAD群と健常対照群との間に社会的認知機能の有意差がないとする研究も存在し、これらの不一致は評価課題の種類や方法論の違いによる影響が考えられる。

米国のRobertsら（2011）は、社会的認知および非社会的認知の複数の領域を簡便かつ実用的に評価するため、Social Cognition Screening Questionnaire（SCSQ）を開発した。その後、蟹江らはSCSQの日本語版（心の状態推論質問紙）を作成し、その妥当性を検証している。本研究の目的は、日本語版SCSQを用いてSAD患者の社会的および非社会的認知機能を包括的に評価し、SADに特有の認知機能の特徴を明らかにすることである。我々は、SAD患者は社会的認知機能に障害を示し、それがSADの中核症状に寄与しているという仮説を立てた。本研究の成果は、SADにおける社会的不安のメカニズムを解明し、今後の治療戦略の構築に資する可能性がある。

【方法】

対象はSAD患者27名（SAD群）と、年齢、性別、知能指数を一致させた健常対照群27名とした。SAD群はDSM-5の診断基準に基づき診断され、日常生活における主な障害原因がSAD症状であるとされた。評価にはウェクスラー式知能検査、リーボヴィッツ社交不安尺度、自閉症スペクトラム指数（AQ）、ベック抑うつ質問票(BDI-II)、SCSQを使用した。SCSQでは非社会的認知（言語記憶、文脈からの推論）および社会的認知（心の理論、メタ認知、敵意バイアス）を評価した。人口統計学的因子および臨床因子の比較にはχ^2検定またはマン・ホイットニーU検定を使用した。SCSQ得点の群間比較にはマン・ホイットニーU検定を用いて効果量をrで算出した。相関分析にはSpearmanの相関係数を用いて、SCSQ下位尺度と心理的特性との関連を検討した。さらに多変量共分散分析（MANCOVA）を実施し、SCSQ得点に影響を与える因子を検討した。効果量はpartial η^2で算出した。

【結果】

SAD群は健常対照群と比較して、SCSQの総得点（$U = 219.0$, $p = 0.012$, $r = -0.34$）および文脈からの推論得点（$U = 200.5$, $p = 0.003$, $r = -0.40$）が有意に低かった。一方で、心の理論、メタ認知、敵意バイアス得点については群間で有意差は認められなかった。MANCOVAの結果、AQおよびBDI-IIを共変量として調整後も、文脈からの推論得点における有意差は保たれた（$F(1,54) = 7.80$, $p = 0.007$, $\eta^2p = 0.14$）。しかし、SCSQの総得点における有意差は消失した（$F(1,54)=0.95$, $p=0.333$, $\eta^2p=0.02$）。

相関分析では、文脈からの推論はSCSQの他の下位尺度と有意な相関を示さなかった。一方、心の理論は敵意バイアスと有意な負の相関を示し（$r=-0.76$, $p<0.001$）、メタ認知とは正の相関を示した（$r=0.35$, $p=0.072$）。

【考察】

本研究では、SAD患者が曖昧な情報を解釈する際に特有の困難を抱えている可能性が示唆された。この困難は、曖昧な状況を脅威として認識する傾向を反映し、他者の意図や行動の誤解を招き、不安や社会的機能の低下を悪化させる要因となる可能性がある。一方で、心の理論やメタ認知機能は保たれていることから、患者が自らの認知的困難を認識し、それが不安を増幅する要因となる可能性も考えられた。

また、SAD患者の社会的認知機能を評価する際には、自閉スペクトラム症傾向や抑うつ症状などの併存因子の影響を考慮する必要性が示唆された。これらの要因を調整することで、より正確な評価と個別化された治療戦略の構築が可能となり、SAD患者の症状改善に寄与する可能性がある。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　　磯部　祐子　　）			
	（職）		氏　　名
論文審査担当者	主 査	教授	荒木　友希子
	副 査	教授	下野　九理子
	副 査	准教授	野田　義和

論文審査の結果の要旨

本学位論文は，社交不安症（SAD）の社会的認知および非社会的認知に焦点をあて，SAD患者に特有の認知機能の特徴を明らかにすることを目的としている。SAD患者は社会的認知機能に障害を示し，それがSADの中核症状に寄与しているという仮説を立て，SAD患者，および年齢，性別，知能指数を一致させた健常対照群各27名を対象に，ウェクスラー式知能検査，リーボヴィッツ社交不安尺度，自閉症スペクトラム指数，ベック抑うつ質問票，SCSQ(心の状態推論質問紙)を実施し，統計的検定（マン・ホイットニーU検定，相関分析，多変量共分散分析）をおこなった。その結果，SAD群は，健常対照群と比較して，SCSQの総得点および「文脈からの推論」得点がそれぞれ有意に低かった。また，相関分析ではSAD群において「文脈からの推論」得点は他の下位尺度と有意な相関を示さなかった。これらの結果から，SAD患者が曖昧な情報を解釈する認知機能に特有の困難を抱えている可能性が示唆された。

公聴会では， SCSQによって測定されたメタ認知の概念は一般的に心理学研究で用いられる操作的定義と異なっていること，相関分析の結果の解釈が不十分なこと，SAD群における対人恐怖の程度や生育歴との関係について検討がなされていないこと，サンプルサイズの問題などについて，各審査委員から指摘があった。これらの指摘に対して，磯部氏は自らの意見やこれまでに得られている知見について論理的に説明し，回答が難しい指摘については今後の研究にむけて検討すると回答しており，十分な質疑応答がなされた。臨床現場でSADに苦しんでいる患者に対して研究協力を依頼し，データ収集をおこなうことはたやすいことではなく，本研究の実施には大きな困難があったと推測されるが，困難を乗り越えて意欲的に取り組んだ本研究は，大きな評価に値すると思われる。今後の研究の発展を期待したい。

以上をふまえて，本研究の成果は博士（小児発達学）の学位授与に値すると判断した。